小野功龍（おのこうりゅう）

天王寺楽所雅亮会楽頭、理事。相愛大学名誉教授で音楽学研究家として知られる。雅亮会は、天王寺楽所消滅の危機に際して木津・願泉寺の小野樟蔭師が残留した楽人や篤志家を集めて明治17年に設立。四天王寺、住吉大社、今宮戎神社等の行事に出仕するほか、海外公演も行う。功龍師は樟蔭師の孫で小学1年から雅楽を習得。

楽屋 よもやま話

自然な音、呼吸するようなリズム

大学で長く音楽学の教鞭をとっておられた小野功龍さんのお話は、理論的でわかりやすく非常に面白い。雅楽の難解なイメージが氷解していく思いがする。

縁の下の雅楽

「縁の下の力持ち」ということわざは、四天王寺の雅楽に由来するとされています。

10月22日に太子殿西庭で「経供養」を行う際に奉納されるのが「縁の下の舞」で、かつては非公開で舞われていました。「人の目には触れないが非常に重要な法会である」ことから変化して、「縁の下の力持ち」になったそうです。

楽器ができないと舞えない

雅亮会の楽人になるには、4年間、雅亮会の雅楽練習所に通って約七十曲のレパートリーを習得することが必須になっています。さらに演奏会はオーディションを行ってメンバーを選びます。

練習所では、「舞をしたい」という人にも、まず三管（龍笛・篳篥（ひちりき）・笙）のうち一つを覚えてもらいます。というのは、管ができないと雅楽特有のリズムが身に付かないからです。舞楽のリズムは、理論上は四分の二拍子ですが、西洋音楽のように等拍ではなく、楽譜に表せません。その微妙な息づかいを管の演奏で覚えておかないと、自然な動きができないんです。

指揮者がいない雅楽

若いメンバーに「どうして雅楽をしたいの？」と聞くと、「西洋音楽と違って自然な音や呼吸に合ったリズムがいい」と答える人が多いですね。学生時代、ブラスバンドをやっていた人も結構いるのですが皆「西洋音楽は指揮者が意図するよう演奏しないといけないからイヤ。雅楽にはそういう強制がないからいい」と言います。

雅楽にも楽頭という存在がありますが、それは鞨鼓（かっこ）を打ってリズムやテンポを規制するだけで、指揮者ではないんです。

演奏はお互いの呼吸を計りながら始まって、お互いの音を聞きながら、同心円的な音響を作り上げる。しかも自由勝手ではなく約束事もあって調和がとれている。そんなところが、西洋音楽を演奏してきた若者を惹き付けているようです。

春～初夏のアート情報満載！『MEET OSAKA Vol.30』配布中

春到来！まちにも新しい息吹が感じられますね。暖かな陽ざしにさそわれてつい出かけたくなるこの季節、まち歩きをかねてアート探訪はいかがですか？関西のアート&カルチャー情報には、『MEET OSAKA』をご利用ください。Vol.30（2月19日発行）では3～7月の伝統芸能公演&展覧会をご紹介しています。3月花形歌舞伎や春狂言などが華やかに上方の春を彩り、展覧会では、大英博物館やルーブル美術館と並ぶ古代エジプトコレクションを擁するトリノ・エジプト展が開催中、そして平城遷都1300年記念の大遣唐使展や没後400年を迎える長谷川等伯の大回顧展もまもなく始まります。春から初夏にかけての今号は、見逃せない情報がいっぱい。『MEET OSAKA Vol.30』は、近畿一円の空港、主要駅、ホテル、ツーリスト・インフォメーションで無料配布中です。

※『MEET OSAKA』は、今回のVol.30をもって休刊することとなりました。2001年の創刊以来、多くの皆様にご愛用いただき誠にありがとうございました。